繪本豐臣勲功記

九編九

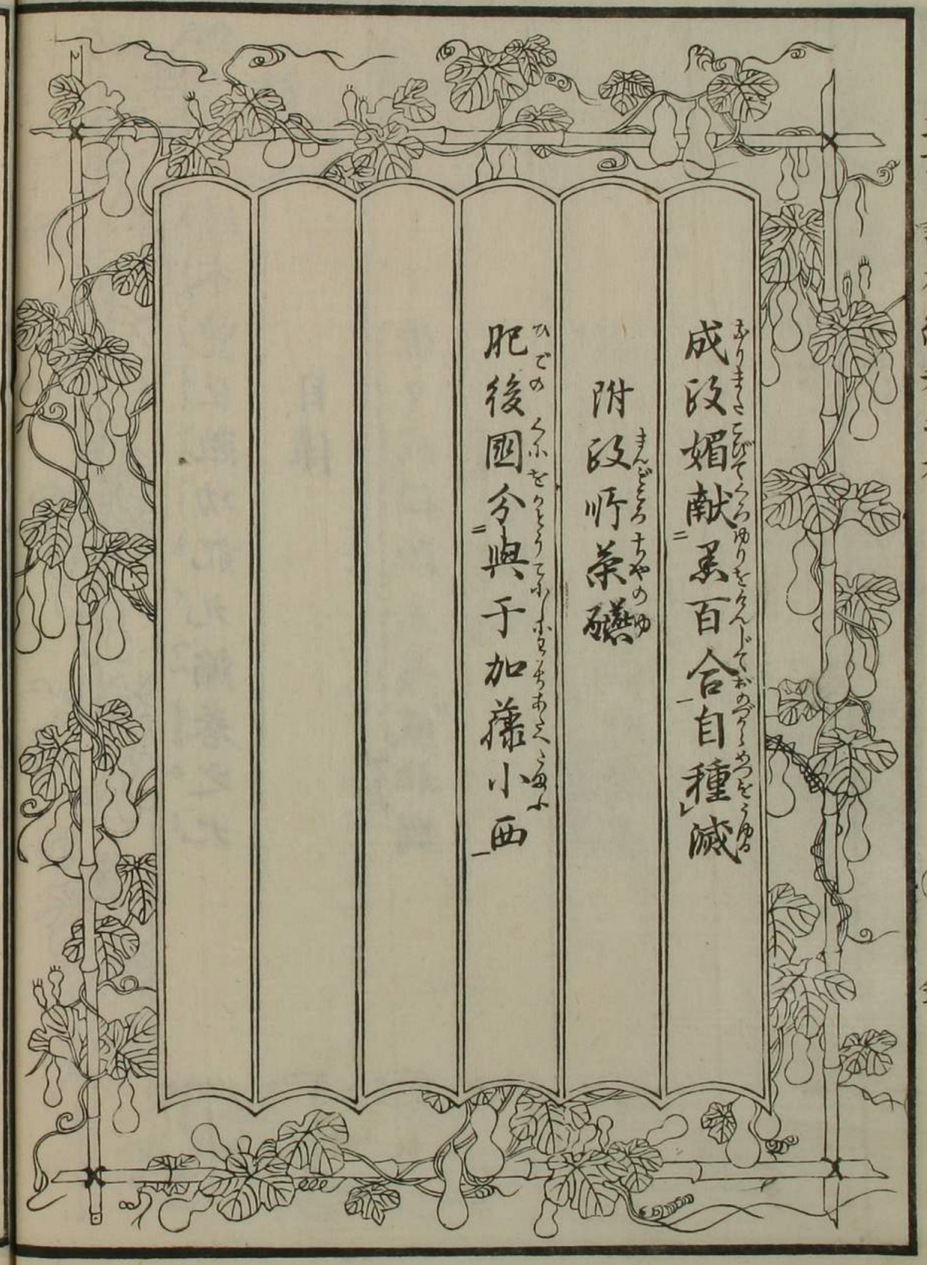
遠13
2209
89

門へ 13
2209
89

繪本豐臣勲功記九編卷之九

目録

佐々成政孤立震威北國
附妻結愍恨
成政戦神通川被仇怨鬼
附北國平結



繪本豊臣勢功記九編巻之九

櫻澤　堂山刪補

佐々成政孤立襲威北國　屬妾結憤恨

孟子ふ所謂人と叡をと嗜まざる者あるべ。天下の民領を引てこをふ望まんといえる。是仁義と先ふ一利と後ミセざんべ去ゝあゝぢ。人と叡をよその報果ふくんべ止まゞ。皇帝といえども這報らあゝぢ。己玩来三世のうちふあり。恐るべく慎むべ。蓋這巻ハ漢発ものハ年月をでふ回の已先ふそある。然バ織田家の四臣ふて ありゝる。佐々陸奥守成政ハ越中富山の城主ふ一て武勇絶倫の猛将あり。己去天正十一年の春三月その分ハ

柴田が麾下なるを因て。彼家紋が嶽出戦の機会に成政一万石の名を率して。越の柴別大聖まで。出陣を迫びしかども。彼家忽地滅セしかば。進退此を窺て。世の動静を伺ふとおろを北国をべて羽柴家の威風を靡彼し。成政一箇の力をもて。敵するとも万全ならじと。人保を收て陸奥を。田城冨山を居住セしを久しくして。同年の十二月。伝雄秀吉と絳桔を迫び。伝雄密使をつかわして。成政と荷擔合さり。成政時こそ来りさるとて。快日出戦の準備セり。然ハおもども北国ハ雪深ふして上洛ながたし。然とて牧豫味を陸國束盛の城を攻此城ハ柴田家の忠臣奥村助右衛つよく護禁て。日を次

うちを天正十二年の二月なり。柴田利長後逼セらるとて。佐々勢遂を紋北を。佐々忠臣原下を。ハ。戦後妻日山の城主上杉景勝と荷擔合をして。おのおのを佐々を弾伐セしむ。こを以て佐々方佐方の城堡を退陸さを。今ハ上杉柴田の軍勢富山の城とぞ囲ふ。佐りりる所を同じ十二年の十月。伝雄秀吉和睦ありて。秀吉直地を大軍を率し。佐佐殊伐を戦中路へ向えるよ。塘敷しりを。成政大を驚懼ス。柴田上杉の敵ある上を秀吉の大軍進来らば。獨立の近城持つべふもあらじ。先や伝雄を宗志を寄さる。隣國の佐奏と荷擔合秀吉倚を占領で毆べきものと思意を廻らし。同年十一月十三日富山の城を佐々与

左衆つ宗能ふ守らしめ。勝心の勇士又十余人を率倶して。降積雪の一丈ふ粉紛りしる山中の険阻を渡ぎ立山近き。文く越ふぞ征安りる。此嶺ハ越中より信濃へ出る樵路ふして雪ふ埋ふ時ハ通ふ能ハざるでハ。易らふふハ越ぐときを別て深雪ふ空気烈しく山中の苦楚いふだらりふ。一歩も先へ進ミ得ざ成りふ。佐くの従名こをが出ふ。政嫌しつ励ましつ。辛ふじて嶺ふ登り。行先を偵度ふ弥セバ。南の禁ふ炊烟とおぼしやしくて。一縷右ろ〳〵と紀上る。成政莞爾とうち笑ひ。あるのをを彼ふの烟りこそ君仇ぐ命の索ふぞあるふ。さる〳〵越の名ふ冒て汝ふ来と御立ん君ふ続けや矣輩とて扉風を立さる如き険阻

ふ雪降積る断崖を横てふ物ふ臂うち抵て百丈だらりと瞬息ふ目征ふセし烟立林の人家の茅ふぞ落さる。又十余人ことぐく疲ふく此ふ裏ひろるぐ樵夫ふや猟師ふや。又七軒の茅屋あり。又十余人ぐ直下しふ此猟舎の前面ふ落さる。君ふ殘きて紀出て来る〳〵甚ふ怪ミふぐら。仙所より来し人〳〵ぞと問ふを佐くぐ近佐ある遠弥矣弥といえるもの。ときい近きふの守ふ仕ふまつる四方ふるぐ。伝聞国祝筋の跡上へ火急の用仕ふさ々ふ公ふあり。深雪ふ路次の行先を失ひ図らぞ〳〵ふ踏迷ふさり。今宵の用宿つくふまつり。翌日ふん道の案内ふ紀よと。金張多く脱へ出をバ。浩る密山の幾支ふぐ生涯ふ

もふき敵を得さるべ。雀踊しぬるだろうふ赤び茅舎の内を掃潔め此ふ迎えて亀を著肩して陳設すると焚煙ふ向もセ。汐を浴セふどして。衣を尽して餐面ふ向るまど。翡翠絶深谷の住接ふあるまバ。進饌もべき食料もあるまど。奇しき器ふ栗の混同する姫飯盛て餐出しぬ個く氣と。

ふ慙えざるべ競ふ喫食了酒やあると汎ぬ引まバ。然バ清酒い爰ふもえることを得ぞこまより一里程を下らバ。然るてふ山市あり。波寄ふて冬中籠居する輩の嗜める礦磑を除礫鹿と称へて甚ふるくもんべまど。丈ふても領セさるぬたぐ。兎来て饌めあんやといふふ快く沽て来まセと二三箇の丈を走て又斗だり買来る丈

がる序へ氷魚篠籠甲刀乙刀と捧たセ還り京洛の名士ふこまを進め。酒色の温熱ふ投助らまて。雪扶の苦を侵しつも曉るを等て豪内さセ。伝説上張弱ふ出さりり。近不より人を擇で甲斐駿河の法度までを一味ふさしめ。秀吉北國ふ攻的たぐ狭伐ふセるべふ交ると計磯を弱し。丈より尾張清洲ふ到り。張雄ふ渇してふまを策励し。遠うるぎして羽宗を滅没公と将軍の職ふ昇セん。努て惰弱を懐さるる。莫と堅く孫器を謀じ合。ふるべ深雪を踏分て富山の城ふぞ攻りりる。茲ふ一怪孕の発起ことあり。成改の老妾ありて名を卑百合とぞ称ひりる。現ふ傾国の色を持て媚まバ厂落魚沈を笑えバ花

悔ぢ月用る器をしきたと数ひもあるまぢ別て去年より
胚孕ル見バ成政ガ寵偶平日ハ慢て下ハい垂ゞと電ガ
りゝり。ちゝるハ十一月十三日同意の弦矣を荷擔合と。
建部長と長として。近侍の勇士及十余人を率ゐへ秋
蒙くく敬して他國ハ密行此夠ハ嵩りて竹沢隅四郎と
いふ扈従のありしガ。病病ありとて供従セざ成政意中
ハ疑ハガら其侭ハして歩寵つゝも北日浄の歩途を
経て計議を部合て還城セらるぬ。又ハ成政ガ婆妾早
百合のちゝハ三箇を抱持しるに。ハ百合ハ三個ハ
後見て招見然ハきざハ寵ハ三個ハ先んド双ハき軍と
ぞ考らるるハ。いゝでゝ他女の嫉妬ざゝんや三女交

悪計し。這遭竹沢隅四郎ガ疾ともて。君仍の供セざるを
幸として。竹沢そゝろハ早百合ハ情を通じて在加福早
百合ガ胚孕る種ハ隅四郎ガ下子セしありとち一流
言セさセしなどハ勿地成政の耳ハ入りハき。おのを慢
しと思ふ気ありて。隅四郎と表る時ハ。そを気色ありガハ
見也。是あん隣児ガ盗をと思ふて表をバ。倫ハ恥ハ現る
ハ等し。又ハ之ある曉のころ。早百合ガ國の通門ハ。ちい
さ紀綿の嫌袋の隆てあり。成政速くもこをを据ふて疑
ひをを〳〵発起て茶壺をもて袋のぬしを捜らるるハ。
竹沢隅四郎ガ持るありと所へぬ。成政動然として眩惑
鬚髪を逆ハ。郎時ハ竹沢を呼出し。庭糸ハておを毆

殺し。鐵刀收めもやらぬ暴佐武士ふ云嗔。早百合ゞ釈族一個も殘さぢ。神巫川ふ怒出して女ゞ長ある黒婆と。左ぢふいさく絡吳宙ふ約揚怒声振耙て。汝人畜恩義を忘れて竹沢ふ戮合ゴ吳ふ堅セー恨わーさよ。報を知ゴやと叫びつゝも。提斬ふセんとする刀ふ綽吳漠ていふ妄弱て覓ふし。然いふとも听容こ女たゞ。切て孕りし児と産て。其後羅汎ふ入らーと。託ゴど容らで毆下ーらべ。今まで発吳の早百合の相好。忽地悪鬼のおとく変じて。やおゴ成政発ふきものと寃て。妬婦ふゞ妖云ふ惑えさゴ。紙乃の成攸ぞ冏念ある。寃ゝ頻て汝ゞ家門と。今日のおとくふ報殺さん。ふもひ云ゴやと大ふ叫嗔目を瞋らし

てぞ斬ゴりる。別程の成政此も怖ゴぢ。早百合ゞ釈族十八人と。一時ふ斬セて獄つふ集云衛といふもおろらふりりり

成政戦神通河被仇怨鬼 屬 北國平定

妖ハ人道の滅を萌さその兆ゴあり。是天妖兆として人心と。ゴさーめんと欲さといえども。是を覚らざるハ自滅を迎招くふふん。妖ハ人ふ由て興るといふ。故言冝ある ら ふ。茲ふ佐く成政ゞ神通河の敗北ハ。その滅兆を示セるものあり。然るゝどゴ陸奥守成政ハ。秀吉近きふ大軍を将て富山の城ふ推進るよー。紛ゝとして嬉報ーりゴ。情名の輩と数十人撰出ー。あるひハ掴云琵琶法師骨

董が高悲田驛計おど。品くゝふ形模を襲化上方の蹴蹊と
仕たせさり。浩て二月だりふーて。時児漸次ふ走返り。
遠遺羽柴の隊紙と聆竅て侍ふふ。佐く方弦ふ勇士多く
て。加賀能党戦後苑溟の通路ふ際ーく防凜の会と重ふて
紙嚴重ふるべき欽性加戦能の場ふる。久利迦羅ふ向の
叙所のこ。演祖と擾で密くしく。防会もふるまじりまべ。
大軍一統ふ久利迦羅戦ーて。不会ふ富山へ推逼ふん。軍
戦の決ーいふりと呉口同模ふ告さりーりバ。然こそふ
らめと佐く成政先遠方ふも其準佐ふー。秀吉ゞ軍配の
背を鈌性一戦ふ拉ひでくまんづものと。久利迦羅嶺の
叙所くくふ。九箇所まで寨堡を築き佐く勝方清つ伝治

成政の姪子 同孫十郎成治二男 同白龍丸 同孫能 同槍方弟門
改連松系又帝会清直元。大木弥助兼能 木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
のふて清正 ことらと将として對凝守らセ大木大石
と凜彼セーめ苑禽も徒ふい通えセードと最嚴ふりまへ
さりさるおどふ考ふ原下いおふード八月の上旬佐山の
軍勢を催促ふさふひ戦の中列ふ発向ふる先陣い蜂須
賀堂の一万弧弦二陣い丹羽加賀守長重 丹羽又帝方弟 長秀の長子
りふゞ一万弧弦三陣ふ筒井伊賀守矢次ゞ七ふ弧弦四陣
い姫尤弟い督秀改ゞ八ふ弧弦又陣い浅田宰お秀家ゞ
一万又ふ弧弦古陣い秀吉又の本弟の市陣百姓の軍勢
二万又ふ有弧弦とぞ図えふる。鱗次と行て加賀國の石

佐々成政更々越の
難所を逆落し
信州へ趣く

川弱まで推進此ふて隊伍を決定さるふ元来老ゝ孫計と。唯幕の中ふ廻らしさるひ。勝利をふ里外ふ恣ふしさるふ名将ふて在ませば。久利迎羅城より推進る軍紙ハ佞臣ふして佞こゞ間者の京辺ふ潜在んおとを察意し頗流言セさせさるふて。敵の部配を遠セしめんぢ姑智あり。然べ石川弱より先隊の軍勢又万余（内丹羽の一万余ふて合せる）

方信井の七ふ海の八ふ浜田の一万又ふて合せる）あり。

の馬繩を正中ふ擬立させ。久利迎羅崇ふ面向セ秀吉ふ以ふハ本弱の四勢二万又ふふ。弟田又ふの逆兵一万又ふ。彼是四万の軍勢と率俱セら已。紙衣石動の出陣より。兵糧ふ乏乗さるひ。城中滑川ふ忌者あり。神通川を右方ふ掩流て。民屋を悉く焼拂ひ。直地ふ富山の本城へ採逼んとぞ號ませさるふ。佞く成改不意ふ拔已て恐怖さることおゝさるぞ。旦烈然として怒て曰秀吉勝くも歌係を偽け。君軍勢を久利迎羅へ勾引。富山の城を空虚ふして。君を伐んぢ計るべ。已ど。君いづくんぢ猿面郎を怖るべきや。秀吉自身此ふ来ることを幸ふ已。羽柴が本陣を蹴崩し。古猿を擒ふ。ふ擒ふしてくもんと逞兵曰ふを。勝山し。神通川ふ出張ふし。ふ松肪黏て待蒐さる。羽柴勢唯一揉ふ富山の城堡を乗奪んと。先陣前田ふ率進て加賀経略元利猶谷狩坂平野を敵として曰万の大軍宛波涛の沸起ごとく神通川を渉らんとして。先隊曰万百河の央

ふ撃投さう。此晌彼くが弟孫伯より時号と発へて一炮発てバ。それと斉一撃出す炮矢ハ反のおとく雹の像く。面を匂べき途と失ひ。六七十人河中へ惹仰倒ふ撃踈同さ也。流つ淪そつ流るゝと佐く勢祝るより開ハ蒐也と。周と合セ鈴第写と伯蒐勝廻と張セて掛蒐也バ。上方勢ハ遇敵難て乎兵ふ発へるゝと弟田利長ふ右ひふ怒り。蓬篠自兵の拳止や。多寡の知さる弱魚の一群。自軍京魚の大軍あるふ。ふふ怖しとて背頭や発する。海セや人く進めや弟め。河推歩して芝居と揉らバ。捷と獲ること必定あるぞと。烈しく指揮して衆振起也バ。こをふ気と得て大軍一同と也岑じと河ふ箍投。佐くが先隊と彼方の岑へ突と苦もふく退返た佐く成改こを也発るより。激声放つて斜芝ふ。軍ハ勢の多丈ふ憑らず上方練磨の碎易兵何万ありとも斬岩さんことやハある。撃や崗セと下辞する間ふ色院紐の狭卒と。ふ言き堤ふ推上し。乙玉こめて撃発さそれバ。ふも進兵の倭伐ふ発也る。と也さるハ兵巣ゑ也ふつ。けと成改馬と正斜ふ進め。退つ退しつ二三遠桃合さる撥舎こそあ也怪しや飢と吹起る暴風天地と吼動して巻のごとき電と雑えて乾の方より霹靂発る。危やと発る陰ふ成改が先ふ進めし。旋歯懐爆くと雷と発して。うち折る風反ふ。面と射べきやうもふく進まんとする佐くが兵士ハ只躰竦で攘奴

老吁怙憾やと大将成政絶踏張殘舘部て四方を眺望見
ふせば神通川の水上ある呉服村の樹陰より氣百万と
も筆竭せぬ最恐ある陰鬼現ぜまふく劔よ戈よ提げ。
あらくと興を作り成政冒蒐て跳来ぜば風雹きそく
暴発て石を飛し樹木を傾し波はさかぐ〻ふ山の如く
成政ぐ馬と共僵を了得の成政渾身より。熱湯のごとき
汗を流して怪しきものとのらんとされども舌根禁で
唖ふ似うう発る〻〻怪雲霊浪ひ降りて。女形の一鬼火焔
と放ち。成政とおよと鬼へしぐ。成政心神怪乱して。忽地
馬より撞と墜り。近侍们おひふ周章怯きまどり足
どう肩輿ふ擬辛くも城ふ逃投りぜ〻ば。殘名いうで一礙

もあ〻べこそ。延〻ふ赤つて放走さるを。逃ぜまじと上
方勢追逼〻〻薙紀ぜ。水ふも陸ふも城名の嶺を稜
で山をふを撃殘さ逃さる僅の城名危く命拾得て。城ふ
逃入四門を固め恐る怖る防戦されば。羽柴の勢ハ城の
四面を十重九重ふ囲ミ。炮矢雨ふ攻乾るふぞ。這
城今ハふ〻〻ふ有持べふ相ハあ〻ざりぜり。此日神
通河ふ怪を化して。ある物ハ日寛害〻〻る。早百合ぐ怨
魂ゑやありぬらんと。ある車ハ怯ミ思ひ。ぜり。歯條ハ
閑き羽柴方の先鋒ある。蜂須賀丹羽ふぐ又万余藤の軍
勢ハ。加賀。那を以白ふ久利迦羅嶽ゑ純筒ひ興を発り
名統を発莵切く示攻るといへども所ハ名ふ遇北別一

成政怒て
愛妾早百
合を殺し
其一族を
誅す

の険岨ある第不くこゝを丸結の寨堡と築き設さゝべ是
ゝの逆矢を発放し術を謁して防ぐゝどゝ矢ゝい
隘べゝ法相も考えず上方勢ハ敵より大将の旨指揮あ
りて城矢の惟猿ぐをまちて容易陥没ゝしつべきよし。
預て課出さゝゝ乃ゝべ虚ともて矢ゝ攻る相とし。時号の
時第と窺ゝ。此ゝ苦柴ゝも九寨の法将ハ富山の敵
亡ハ微塵知られべ。遠方の外ゝ歓ハゝ〳〵と憤決て死
憤と殫し。ゝ〳〵ん根機の努奬ざけ盃痕を沢さず防いざ
る。機会富山の本城より廻馬来りて告て曰く。秀吉曰万
の勢と率ひ舩及の海路と花縋。滑河より糧放して。祁
通川の一戦ゝ自軍怪しく敗ゝして今ハ富山ゝ捕囲ら

ゝ危や城畳傾ゝんとゝ。ゝ速ゝ援助ゝゝとぞ鉦ゝり。
法将おゝひゝ猿怖ゝ。九将猿合ゝる際もゝく。考遠
ゝゝと寨堡と奔。後防ゝ壓会も歪べこそ。採器械とざゝ
反敗ゝ。富山と囲て走るもあり。外方も決至めず敗奏も
ありて。猛勢方ゝ〳〵ざりゝり。進会の法将此相と考て。
既早ハ本陣の旧勢ハ。速くも富山の本城と反囲むと覚
ゝり。遠方の寨堡ハ攻るゝ足らず。疾退撃して一個も残
さず。屠殫せと呼り奥。第防法の孔橋鹿角凝。ゝるひい
早桝食文加。柵の梅えと突退陶去。苦もゝく絶嶺ゝ独登
り。浮田の勢ゝ寨堡と焼しめ。姫。丹羽。蜂須賀ゝと猪ゝ。光
牽ふて逐敵去つゝ。宮岡ゝ枚ゝ推逼ゝり。浩りゝるゝど

ふ羽柴の大軍。神通川ふ肥と波し。弟後の熱勢十万余騎。
黒川。大坪。東岩瀬。放生浦まで充満して。一度ふ鋭を拳さ
りしらべ。方僅ハ此城三子畏程の一微塵とも偶つべく。
況ふく風烟破卵より。成政いらふ防ぐとも。蟹ふいへ
る海水一掌の遊ふるおとび。既ふ一二の鄙潘も破らを。
決心如のそ捕殘さをて安危ふ極りりを。本居ふ
火を放自殺をべふ懐ひしらど。世ふ鶴業を懐記者。義遠
も祉を思び。家命の二を全ふせんと。秀吉公の本陣へ使
者を向て。玄欺うち雑種くふ解邪言し。降条のるを疾
幾秀吉公も成政ぞ武勇を。快より憐惜しおえしまセバ。
弟後降条を免さセらるひ。拠尾吉晴をもて城を歓納ら

セ。諸士裏卒まで助命安堵おさしめりるふぞ。大将成政
自結して。本陣ふ参候ふし。秀吉公の御弟ふ旧首布伏
を。弟将軍こをを覧あり。顧然として大笑しらひ。成
政くく某方向後秀吉の傍ふ侍して茶坊主の役を努
むべしとて。髪髪を剃らセて倶セらをひ。弟と偕ふ
上洛をべしと宣ふ。紹を撓武の成政。否と一云逆らひぞ
く。擬を折膝を屈して。茶胴の敬局ふ列まるハ。単ふ秀
吉公の武威廣太あるを識をりり。此こ至て戦中全國平
均しりをべ。此國をもて茶田利長ふ鋭与しらをひ。弟時
こ班軍おをしをものところ。一体意の在まして。近士石
田治部ふ捕。木村弥一右衛つ。両人ふ雑卒をづりを三十八

人を侍供せらるる。富山の城を辞せらるゝふて。直地ゝ戦後の國ゝ入りらるゝひ市振の境防の柵うち戦て祝ゝ不知児不知ゝどいふ所をるり。宇田弱返り。青海川を綺海し。八月廿三日といふゝ踰水の城下ゝ居せらるゝふ爰ゝ戦後國妻日山の城主上杉弾正少弼京勝ハ秀吉ゝ不日ゝ戦中を。平治せしよしを関ゝ聞ば。浩てハ平勝威ゝ家ゝて。此國までも乱入せべし。準備ふくてハ私ふまゝと。玉境より五里の此方踰水清海ゝの城ゝ家居須賀修理之亮をもて對籠らせ。大将京勝ハ一万余騎を引率して青海より一里半程此方ある糸魚川の城ゝ出陣してゞ在らるる。彼有所ゝ秀吉公石田木村の侍士を随従青海の

塞堡ゝ到らせらるゝひ木村をもて使をしめ城主須賀修理亮ゝ課らるゝハ。彼柴秀吉使者をもて。言葉をるるの門を冥きて客らるべき平。且ハ城主の城を出て對面を遂らるべき平。浩まゝ来るものハ彼家の居家木村孫一右衛門なるものゝありと京演りをべ。修理亮邪刻巷頭ゝ出。秀吉公の宿りらるゝふとも右ゝ旅宿へ参り木村屋ゝ見参仕らんと言しりをべ。木村を出後亭ゝ迎客る。秀吉公修理亮ゝ傍近く居憑らるゝひ。ハ秀吉ありて上杉屋へ直ゝ言伝ぞべき彼ありて近習の者一人お具し。是まで来戦らる。妻日山の城へ言遣し。對面せさせハへと課らる。修理亮不審ゝ思ハ新とつくゝ見守ら

ひしゃ。まゝふ方ゑき羽柴公ゑて有りをべ。おわひゑ弱き跳猿退て平伏し。彩い懐役りぬ入弩ゑこそ会礼を究免あゝせさゑへ。彩るゑて也従意の旨忍多くいへども。旧命を遵直に奉ゑしまいゝセ経き條あり。居俤が不力ゑいへども。主人京勝の拵図ゑよりて。返寨を守持ゑを任さをべ。忍ゑがら旧単続ゑて在をとも。這地を通しまいらせてい。鈌磯の冠免をがさ。強て旧通行あゝせさまふ懐紀ゑいらをぶ。修理亮が首を刎ら乭。然して春日山へ到らせさゑへと。紀を決して言状を秀吾公聆しめさ乭。吁時もしき咫紀哉有係ゑ故謙信の遺風の逐慕し。上杉家ゑい良武士を居ゑ持技せり。いうゑも汝が紀ゑ信セ乭日山へい到出ゑまゝ。平が言をもて急使ゑ発ね。京勝へ言経べし。彼所の返答あるまでい。汝が居所ゑ滞留をべしと邪時ゑ城中へ容らせさゑへべ。修理亮謹で逆結しさてまつり。饌美を竭して餐応ゑしまいゝセ使者を火急ゑ糸魚川の本陣へ弛て。紀と言送りをべ。京勝心中愕呀として。家臣を呂集評議ゑるゑ。或いふ弾劾して後患を断さゑへと。或いふ好を結ぶ時いさをりと。時ゑ直に山城守宗継抽出て曰く秀吾返遣単続行して西國ゑ到乭るい内ゑいい自己の大義を示さんがさめあり。外ゑいい礼儀を原ふ見拙上杉家を責復セしめんさめゑをべ。天下を弱動しゝさゑへる。上杉の所為として秀

右を此ゝ欺き毆うん淺ゝしき汁幾頗義もゝく勇もゝ
くして嘉家の芳名を臭損するよていへば。何ハともあ
れ秀吉ゝ對面あり。両家の親を厚ふするゝ和幾調たで
牟結を做ものも。一面秀吉を送還し。その后深白ゝ戦ふ
て。雄雄を決しいちんこそ勇士の所行と京もべゝもと。
理の全道を演ゝれバ。京猪も強ゝもと念ひ直ゝ勧云
ゝ同意して。近付口ゝ名歩卒又十人を率ゐへ逢水の城
ゝ郡ゝれ秀吉ゝ對面ある。羽柴氏ゝも哂若笑弥平和ゝ
して。更ゝ敬國ゝ在相ゝえぞ自若としておもしゝれバ。
京猪いよゝ慇懃を竭し左右の近侍を遠ざけゝなひ。
密候致時をゝしゝなひ。両家の和幾全く個ひ羽柴氏ゝ

ハ富山の城ゝ還らせゝなへバ。京猪又里程外まて見送
て別辞ゝ。糸魚川とも退拂ふて毒日山の城ゝぞ還ら
れゝる

此時秀吉公ゝハ内大臣ゝも昇進ゝなもぞといい
えども。史の本末不明ゝして。官況ゝ考ゝの闕
白ゝる緯を圓知ゝバ。公と称するものゝあんあ
り。公関白辰下と号私セざるへ時ゝ天正十三年
ゝ至バ。其叙目行ゝ至ざるべあり

翌ゝバ八月九八日富山より幾後青海羽柴氏ゝハ大
軍を四程しゝなひ。幾富を辞て京都ゝ凱陣ゝをしまし。
いよゝ万民を安きゝ垂しめ。天下の政を穏ゝ行ゝセ

さるひ。仁義礼信を施しさるひ。遂に中國四國九國をも平治ありて。天正十五年の初秋といふに佐々成政をも

て。肥後一國の主とハ任じらるゝ

成政媚献黑百合自滅　附　政所紫礫

山海經の序に曰へるごとく。郭璞序怪しむべき所と性まざる物ハ性ふきに義しとハ理を窮るの道に在欲此に

濃と設らる黑百合の喻也支百合の花色の黑あるものハ。丹と正とを故に山丹をひめゆりと訓巻丹とおゆり

と訓ず。丹の色なる其性陽の極る所にして南火なり。

然るに黑色の性なる北水陰の極る所にして北水なり其

極陽あるものハ極陰に変ずる緯最も遠あり。故に遠く

して近きの理に反る。郭璞が曰る陽火ハ水木に出陰嵐

ハ冬山に生ずると宜あり。火邪地水に変ずる故に丹

も紅黑とあるの理あり。借に此を況べ丹に炭の青ある

紅と擬せば。丹色の火滅されば邪地黑色の炭とふるの

所喻あり。青丹家の紙紅所あり。丹を彩抹して数年を経

ゝべ黑色と常紅と朱とハ此患黑ふきも此山丹花に於お

いて一理あるものの卒後強て是を況べ黑百合の黑色ハ

紫色を視失りさるに反りてハ紫ハ青紅の間色に

て花多く紫色と発ず紫あるハ敢て性しむに足らず今

借に黑色とのて紫色に推その證據を論べ今に云へり

一位の袍ハ深紫二位三位淺紫とあり。その深紫とハ

るハ茄子の色あり。甚を澁次ハ深失りて。今の一位の袍色ハ全く黒色ハ深りぬこゝ其黒の紫を奪へるあり紫の朱を奪ふゆを知て黒色の紫を奪ふことを覚へざるも亦多し紫を黒ハ奪ゝ是を既るハ袍を怪まざるべハ怪あきあり袍まざるべいづゝの所よりろ袍を生ぜん。嘉成改ゞ弘元ありと私するも袍あり北の政所の北方ハ横恨を記さしむるも怪あり。呉果して我ハあり。物の呉ハあゝまゝと謂り徒ゆハ閑きつ佐こ陸奥守成改ハ。四ぐりあくも西國の要地肥後一國六十郡ハ解の領主とあること。実未ハ有の昇進あゝまゝや卑屋下の轅門ハ降ゝして辛く骨を絶ざる身あるべ。縦令宋弘の

主ハあるとも。抽で忠力を竭もべきハ降りての后卑公へ。一臣の忠義もあく。貧年とも経ぬ冗ハ驕領幾中ハ不領るをハも惜る大深を領しゝるハ巧める緣故あるべあり。甚を領端ハ探竅をるハ卑公のハの政所と私しまつるハ故右府伝長公の紱年長義井又左衆つゞ女ハ重女とまうセし帝方あり。を戈智あくまでかしこく。此の弦候太丈ハどの及ぶ和ハあゝまゝ秀吉公卑賤より発り。大業を雑弦ひしも宋ハこの政所の助けゝ女ふとハり。然べ卑屋下ハも政所の智恵凡庸ハらゞと私呉しまふ。初て齒時の風俗として言きも紱しきも戈ある妻と卑しこゝとゝを向斗りその后ハ変族をるゆ。あしハ

べて皆ふありとぞ。此比千の利休ゞ妻も才智さぐれて
ありければ。利休殊ふ是を愛さあるに時ふ名の香煙を需
め得て秘蔵しけるふ。何とやらん格好あしき而有として。
妻といひてお孫るふ妻のいふ此香煙今一分斗り足らし。
切らせさるへといふ。利休ふとおて敢ふあらうとて妻
の腹ふ性ひぬ是ふいい皆此時の流行ふして人くろくの
如し。さればバ秀吉公の才智ともつて撰くむらへ強へる
政所ふ是べ凡智ふあらざる事知るべし。当時秀吉公我
家の棟梁として権勢面を向ふる者もふきに戒勢ふ是
べ。国中ふ色と幸ふ月妾花嬖ろぞと知らぞといへども。
足や屋下の正室ふて在ければ。誰ろい恐れまいら

せざらん。然るふ屋下の寵愛しさへる女房ふ個
おたしましけり。第一ハ此北政所ふあり。第二室ハ松の丸
屋ふあり（年江及京極長吉の女）山の華ふして琴琴しておれセし
賀屋ふ（此ハ蒲生秀賢の女ふして氏々の妹ふあり）第三室ハ三條屋ふ
と称しまいらせるハ（太閤の姫君ふ）第四室ハ加
生しさへひ柴田勝家ふ（此浅井長政の女）第五室ハ淀屋
し三女の内の姉姫ふして其時年十九ふて在セしべ。
天正十又年ふ富るの齢華ハ九三ふぞ長セらる。玉姿絶
雲ふして遠山の翠色眉痕鮮ふ芙蓉の白霧温肌ふ凝輝
を表の花の朝ふも秋の月の浪速ふも名さぐひふく是

かえさう。殿下の金圍の第一媚の艶を持されど。心お
廉恕さうさ。佞舌ふして怜悧なるべ。表情十二分の巧あ
り。こゝをゞさめ親佑の個く淀殿の驕語一斤を奏ず軍
へ。卵令を掷てその情意ふ慨ちんるを嘉む。智もつと
も政所ふ対扱そべ。然ども此の政所へ其性篤実ふお
たさゝるゝども。淀殿の贔へ虚欺多し。実ふ雲壌と謂つ
べき欲。こゝふよつて政所と淀殿と左右ふ方位を互角
して。亀と牟そひ奪と闘し。世ふ星陣の二将軍と潜私
して。甚下風ふ立勇妃寸嬪両辺ふ欲さゝて政所を扶補
あり。淀殿の荷擔持あり。或日へ伎倆の計策て恥むと切
蓋とし。ふある時へ明白ふ古戦金室玉帳裡の淳窮へ高
ふ綿底ふ減を蓋し。袖中ふ劔を罩むゞおとくあり。其一
方へ政所と斜肩として。三條殿加賀殿こゝをゞ副将さう。
ふ保ふ仍意の方あり朝日の局あり。ふ一方へ淀殿を長
として。松の丸殿伊副し。正栄尼ふ技翼さう。か彌ろへ表
日の局阿雪の方。各く後殿ふ威を逞ふして競ふふそ。甚
肩尾ふ従逐て。殿第の法奏ろ〳〵は家人ふ至るまで。此二
方の提契ふ逢ふ刈へ。不意幸祓をはるふ翻て男沮ふ繋
る刈へ。切男実き名士といへども。忽地家國を殘虐セ〳〵
る。然べ内外の將士ふ若英を競ふて後殿ふ阿諂ひ軀の
幸と庚幾恰も猛虎の圏ふ擒ぜらるゝべ。耳を低て餌と
化るとろや。依く産奥守成政へ実ゞ殿殿下の孫下ふ繋ゞ

秀吉親不知の
難所を経て
越後國ヲ
趣き
給ふ

が也。近若と称せんずを思ふて。呂宋渡海あるへ。北政所ハ。漢詩阿諂〳〵。喫ハ嚥虚を楽げ。使それハ紙捆を献ら
せ。別ても近来の流行と〳〵て茶会もつた〳〵行たを。て。田
居茶寮の好古ハ茶礁の外ハ遠抵も。ふきゞおとく。猥雑
さ〳〵。時長ふを。ハ依く成政もその緊用ハ持参べき。器
物例度の種くを。西丈人ハ進呈し。心を謁して。退従りる
ハぞ。いつといふく。後下の仍ハ。ハ悋ひまい〳〵セ。終ハ肥
後熊本の城主と成る。後下系来成政を。遠任ハ的ること。
涼く微妙の遠意ま〳〵ま。を。ハどて。聰明英傑ハおもしま
せ。公あるものと。星房ハおひて。奴人の女〳〵き。結婚を
拒揚。大拒の。居家を。賞罰〳〵て。天下の政ハを。失んや。頗

大度海洲の。神志ハておそセハ。肱股の。切臣多きハ。及し
て。日本の。別。弘。狭ハ。ふを。ハ。各〳〵の。切労を。賞。賞。ふる。ハ。分
樂。ふる。国。弘。足。ら。ゞと。思。石。紀。発。ら。を。朝。鮮。国。を。屯。接。と。し
て。大明国と征涼ら。ん。ず。領。て。の。宿。懐。在。し。ま。セ。ハ。大。繪。不
敬の成政を。思ハ。絶。し。め。仁。沢。ハ。勝。と。紀。さ。し。め。て。朝。鮮。征
伐の。斜。陣。さ。〳〵。し。め。ん。ず。ハ。西。国。緊。要。の。地。を。説。〳〵。ふ。と
あり。浩。りる。ハ。ど。ハ。依。く。成。政。ハ。彩。紀。肥。後。熊。本。ハ。入。国
し。彩。び。武。つ。の。花。冠。け。栄。花。の。表。ハ。遠。ふ。と。と。よ。と。親。族。家
臣。ハ。い。〳〵。る。ま。で。繞。表。ふ。縛。絶。方。ハ。ず。陸。奥。守。ハ。政。を。執
て。佐。分。蒼。生。を。拯。蒸。ミ。り。を。ハ。び。国。中。の。高。家。預。禁。来。賀。を。そ
を。ず。ふ。ら。ハ。隈。府。の。城。主。隈。弘。但。馬。守。祝。永。菊。地。山。康。山。本。三。弘。の。を。ふ

のミ賀参セむ（彼く年紀ふい生給ふふと云者ふいひ付卒を気分へ入る不依て不快を懐と有成政こゝを安うゝぬゝ思ひ弁垂をゞとい懐えども。新ふ気セー國ふをゝべ。十ふ一二い者佐ふーて張めんと。弥主の慶賀と称示とて。玉中の法士と悉皆ふ招集饗応と。ーて饗応ふー。猿乗あんど僅ふさをて。橋脊大品ふ外関セうる。浩てある晌一客あり遠く故國北越より訪尋をとて来りー人あり是富山の奮士黒川の卷丹山といふ学生あり。久ーき斷金の用さをゝ遠きを累えて来訪ふ。時ふ丹山故國の土産ありとて一種の寄州を提投さこゝを古往今来在とも聆ろぬ黒百合の花ふぞあり。産地を問ゝ越中白山の北ふ蛇ゞ池の岸辺ふ生ると

答ふ。ゝ。強ふ〳〵奇ーき花あり。ゝをゝ。九列の酒畔ふて。数老ふるも甚惜とて。速秋を翼らせて。這花を京邸へ献呈ふ。ゝ先ふも言る近来邸の風俗い貴き綺ーきあーふべて華ゆとも。て数程の雪一とを。施中ゆ所方い紹酬利休ゞ風強ふ別深て。朝ふ夕ふそをゞ雅のミふ言と傾く。然る。ふ老成下の己為ふる弥富果い金銀珍宝ふ飽ゆ身ふて陟らセゝ女へゝ。天下の英と窮め四海の珍器を佐宗ふ。て何一端足らざる物のありとも思ん へぞ。こをゞさめふ遐媚の法奏倆後宗ふ献ぞべき物ふ悩む。晌ふ成政遠遠此上ふき立身もこを全く北政所の福蔭ふ倚ところををゝ何ゞふ謝恩ふーまつらんと懐ゝる機会

る。渠等葩の山丹を獲ることゝ千金の緡嫂ゝも犯傷さりとて通俗の近士ゝ命じ出産花贄を鞫しく紀して。こをとゝの政ゝへぞ篠進しる。政ゝゝこをを禽さを。ゝのめゝぞ欲びゝゝひ。浩る珍花と獨り秀て此俗枯さも抵感うるべし。徒ゝゝ巻らせんと菓蘖の輩と筴え念ぞ。齒時天下の英人と懇じ。秀吉と祝揚さゝ。淀殿ゝこそ見せゝば時得ね。彼人いろゝ賢くとも這珍卆ハきぞ祝もせまじ。余ありゝ。と微笑しゝひ。某百合一種の心あてゝ。弱迫の菓舎僅さる。客ハ淀殿と亟菓尼ぞうゝて其準備をあそぎさる。政ゝゝも菓ゝ乃坊者ゝておせしませども。相阿弥三阿弥の一人紹鷗伝長の師ゝの傳流ゝを。此末の利休の流義とハ。そこしく風の古乃さを。世情の緒て新奇ゝ傾く癖あを。右左と思回らせゝひつゝ。利休ぞ女道綾女ゝるものを唱侍らを菓家の調度の相面時味の姫梅ゝど四合せある。此綾女といふハ今ハ百舌殿何来泉殿堺の丁人宗安と茶人ゝの妻とゝり。毎時淀殿こを唱て言の臺子唐物ゝのハ侍も指南ゝり。別て淀殿へ備言ゝく出入ゝぬを。政ゝゝゝも平日ハ綾女ゝ言と孤疑せゝへど。這遠の茶舎ハ。ゝろゝ得べき菓ゝ切者の婦人もゝきゝ窓しく招て侍合さゝふハ。翌ゝん晨侍の菓蘖とせんとを淀殿ともて客ゝ侍ぞべきゝを。よろづの條こ冝ゝ料理て得させ

よゝ〜擇きのちりの花い黒き葩の百合あるゝ。花投器の撰用ゐど。こゝを入てはさきべ〜。古今ゐ云双秀方と図えさる淀屋ゐぬるべ羞むことゝあるまゞ〜おもをらんゞ。頃も黒百合の花てふりのい。まゞ祝ぬ草と思ゐる。爾業蘂の絶までい這室ゐ留足〜て構へて〜淀屋へ喝有まゞ〜くと宣へゞ。あや女灌で幸所。又聘も〜奇〜き花の佶るりのゝゐ父宗易も年淹末好茶の綺ゐ情志を擒ね而有好ゐ軍ゐ集舎〜つるど。黒百合のことい聆ゝゞととそ承所りぬ此い何方より呈献せ〜と尋ねまつるゐ政而ゐい微笑さゐひてこるい和國白山のゐゐありといふ。ゐ蛇ゞ池ゐ生る百合の花ゐて侍ふぞや。そを巨仆の中ゐ生て遥く彩へ彷来〜ぬと図へ彷ふゐいよ〜感巫〜。東ゐ西〜て業具の網交の紳合ゐど。羈くと豫合まいゝセ依舎席の凸料理い皐月の早松蕈ゐ初茄子を庖丁ゐ保咐りん欲。こるい彩歳ゐ潤月ありて。機候幾旬の逗礙さるべ。上様ゐもよふやく吹天饌得らるゝ聆ふるゐ餐らゝるとと宣へゞ綾女懐でゝへつまふを魚指い芸雅ゐておをるども吹今の茄子松蕈い二種とも宣ゝ〜ぞ。父の流改を考扱をるも。不礼ゐていらふゞ。子家の業い唯底ゐも仍を省き。ありの佐あるを宣ゝをゐるべ庖廚ゐも時あ〜ぬ禁ら〜き種品い嫌ひい。鎌加ゝい淀屋ゐい渓江ゝ〜也國ある。山原

き許ハ生立セさるハ ふ若ハてハ
日ハ羞らひ松蕈ふどの濕産物ハ何とやら倉毒情さぶ
らふて愉快うゝぞいられん平若て云茄子の彩鮮ある
と。私儀しいも下品の羽ハしてハ上様の乃料理ハ濕
味の加減早くして。茶道ハ背きいらへべ。這二種と芋菓
と。夕新のふとハ乃換あるべし。甘瓢ふどハ下品の軍饌
いへども。都合淳和ある乃料理ハ成さぶらう。蓴の潤
色ある。甘瓢の淡薄ある。金屋玉堂の機を捉て叶房竹離
の風情を進もる。こゝや芝園のあるドが謂る為徹喝く
として。清風おのづから生ざるの云ハふひさぶらへ
バ。嵩流の茶道ハて侍ると拝謝伏て言肇る政ハ第く聆

召さるいとふ感服ハさるひ有係ハ利休の息女ハ
り。恢よき指篝こそ做て煬べゝり。姫前ゝら終尾まで。心
結と入て料理てよと緒般綾女ハ任ドさるひ。政ハ
低基ふ投りのひぬ這响考反下ハ雌近ハ政ハの沛反
ハ入沛さるひ。云心亞廳を小覩さるふ。そを紛ゝざるべ
利久が息女ハ芦屋釜の下責して在ハゝると。反下ハ潜
潜地歩倚らせさるひ一者時むゝり背方ハ立居さるひ
しが。不斗乃云や深さるひゝゝん。あや女が脊肩を放度設
ゝる阿綾女汝が被乃ハ至らざゝし齒昔緋巾を腰ハ
挺ゝ予が情ハて茶と張さる响世間ハ茶と除て。ゝゝハ
奥恢ものハあゝどと言せしが。今ハ百舌屋が妻とあり。

伝蘭睦じき其中和ふても業ふ勝りて歓楽のあり。
とも懐放ぬらハと宣たまるふ綾女続き思念もらりぬ
ふ屋下の市成放度跳退て平伏まを近ふ宿末と箭帯の
端搖采まを ひ扱寓んとしまを ふを揮放ちて逃いづる。
公ふハこを捕へんと此彼ふ退綾るふ在舎佑女ふも
矣ひ傾け濤冏ふ遊りて遽へも逝れば綾女ハ危ふく長
掾より。蹠足ふて廣庭ふ跳下。棣棠の根と潜り蟇子の
本と抜て端ぐをりふ卒じて淀屋の位まを ふ書院鼻
ふぞ遁投ぶる。公ふも領て淀屋ふハ心と措セまを ひり
ぶ。経ひても遁ひまを ふまを ぶ。淀屋
ハ此侍を祝ぬまを ふて。綾女を祝く唱倚方僅の肩尾ハ

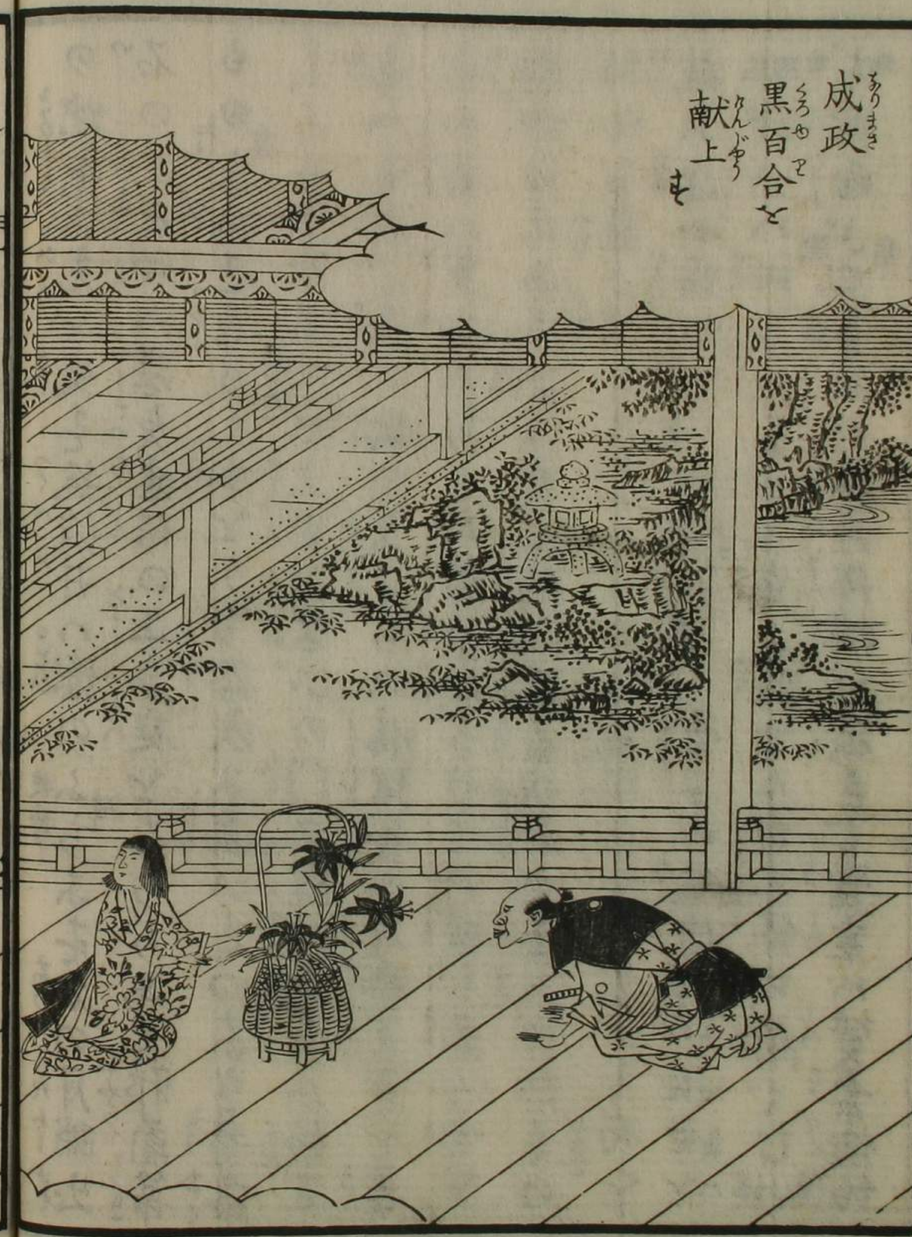
嘔ふも出しまを たぞ酺ふ矣を御セつ。金衣公子の春
報面ふ。篭桶のうちふ小帝しつる風情して南結女汝ハ
高士の妻ふぐまを。づりまを ぐ茶の師ふてさぶらへば。己
らハと毫児の如く思ふて。万煬とふく爆惹と無よ。知ら
るまを 如く紋上のふき咱身ハ唯巾身をこそ実毋と思ふ
ふ己。後来者まを ふ莫と課する言の身ふ深くと。いと
黍まくおもかえて。ふ巧の泪セきあへぞ紛も発さで拜
謝まを り。淀屋拵て課する。翌ふん政而の茶礦ふハさ
ぶんで自侑ふ術と煩セまを たんとの巾巧ふて在さら
ん。汝ふまを でハ孤立咱を扶済人やハふまを んハ工夫の有
汁を祝示まを えとあり。綾女ハやまを やく面を持

拳否乃抵疑あそばさべくゝだ。政丕の乃意ふいうでゝ
巧の在しまさべき。呂唯乃文睦じく祝合たせさゝをん
さめ好の逆ふておたしまセべ乃招あるの外文ふ他念
の在まさぞと唱言をを否く然云い荒唐言あり。領てい
咱ふ敷示たゝと制止ありつるゝん咱女こといい此度
ふ来て義年も歴ぞ年女舟の耻辱まるゝ意苦しゃ。こづ
ららと汝とい。三の世までと契りさる。師束の中和あり
りゝを。今文守捨さゝをちんといい領ていい思ひ知ざりしふ
と。あるい怨じあるい嘆じ。帥しさまふ節くの堪疑て心
も折推寧や逆云ふかゝづらひ舟命を失ふとも乃言の
葉を背くふ乃ふし。呂て図ある若げ一言の情ふい百歳

の命も捨るとい。此ありゝと哭慟ふし。政丕の乃お祝
の玉百合の始終をひもふく結まいゝセ努く咱ふがは
泡さりと。課セある莫と言峯る淀度いとく嫉しふ。
四遠七次伏祥ゝ指を噛て血市と押他言さゝをじと誓ひ
しさゝひ速くわの度中へ伐らセさゝへと付女と添平
地門の外面まで。庭侍ふ階て地ふ送りぬ。逆晌尚も政丕
ふい。後度ふ在さゝひりをび。形有りる孕のありと秋毫
知しめしさゝたで。綾女も孕おきふゝちして乃亞廳
ふ勅へさり。浩りりるわどふ淀度ふい玉百合の紐結密
ふ听獲て。逸早く彼居ふ深付敵中の國白山の梦ふあり
てふ玉百合を探求ととて。日を限してぞ走らセさる。然

往ふ茶礦の酉日ハ。又月二日ありくるゞ。賓主とも準備し。等閑ふくて酉刻ふぞ至る。ゑゝセを綾女ふ宮をセさぬふふ。然べひ姫賢の四會ふさぶゝへバ。七絃琴こそ宜らんめをゞ。隔宵百歩の外ふして。別て樹竹の繁茂さを。ハ。琴まを十二律ふまを。後て通言ふゝまし。利休ゞ嗚し初くりる。嗚陸こそと言答る。其ハとて猶ふこを。と囲棋刻限と得て嗚さゝゝり。四茶のゑゝセの聆へりをゞバ。いづら浪屋正栄尼待合ふ投りゝなふ。改ふふハ猶戸口ふの平地と冗て逆猶ゝなふふ。佶女ども宵做を柱。解の。いと嬬くある嫌擅女同志の挨拶の。礼の云の柴和ゞど。嶺をゞ欠りぬ南山の壽焔を此ふ接ゝる。宗易歌

の焼竈ふ光を交を瓶波井ハ憲のふちふを反の月踏生石の二七ロハ孝貞忠信の正き庭とをぢらふて。邪蘭箒も行雪き屋を添りく水とうち路次ふ塵ひとつふき塵落し。あるゞゞあ案内ひ上世を学びの門の蹂扮向居ふ泌吉ハをれど互ふ徇の烹呈らぬ情張釜の尾膨墓きを義を白炭ハ芦屋ふあゝぬ蘆穂灰。りけてぞ睦む君ゞ世を。匙枚のえふし永りをと。蒔祈漂茶往袖の茶入のひもの解初る。意と共ふさぐくをの浅葱巾ふおのもく。面を拭ふ汗や埃又月反の節ハ器も基子の風煙ハ地炉と反ハ風炉用る ハ四らりあゞら底ふ強せる白木緑の角ぐむ居ち焼地向ゞて主客ハ綾羅錦を被を。廬室ハ質素倹約


成政
黒百合を
献上
も

の調べを手枝ふ上世の閑寂と老し。意中ふ仇國の斧戟と孫を嗚呼活くとして。一服一味の至極ふ拉ぶ。神奇妙級の境さる絯拙筆癡徊ふ写出さんことい。とく〳〵難し。

郊有りるわどふ餐面の叮嚀ある。中立の報声ふハ。十二律の黄鐘と調ぶ（夷ハ双調と吹夾ハ黄鐘と吹秋ハ平調冬ハ盤涉と吹）ふど。殊ふ雅びて余情あり。又情後投いわとく〳〵ろと綻らをさる。形美百合の花ふぞ有りる。君中の紅蕚。美盃の白蕚ハ。千家の秘ふとういえるふをば。此も綾女の指図ふや美蕚の花ともて。狠の甚ふしふ捕らをさり。淀屋あるさ〳〵び珍翫し〳〵ひ味く老さし。憐むべし。咱ふ幼少時よりふ國ある。白山梵ふおりとハ聆ふさをど思ひきや赦ふて

覩賞せんとハ千珠万宝を山塚ふ築とも。こをふハ換ど。と浪漠せらをぬ。此ふして茶の意皆ふ首尾調ひ。淀屋ふハ恐らせ〳〵ふ綾女をたどめ侍没の女中侍ハ茶ふ泰出て。ハ茶を尾よく綱ヨセ〳〵ふの社をハ欽び言誉る。政所ふも恢極よく。奴女ゞ労を謝し〳〵ひ結るふて。も浪の方の孤花をことふふ微〳〵ひしい満足ふぬを。ど。然是精密知るべふ後あし。偽汝侍ゞ返しやセぬりと。汎セ〳〵ふ此晌ふ綾女ハ独絢ふ徹至淀屋の恩義の涙き。政所へ信義の言きいづをとり捨いづをとり取ふ道ふりをば寧ありし陸奥ふ演て自刃し死ぬべくとまで思ひしりども然をれば屋下の八名も出んたやせん右

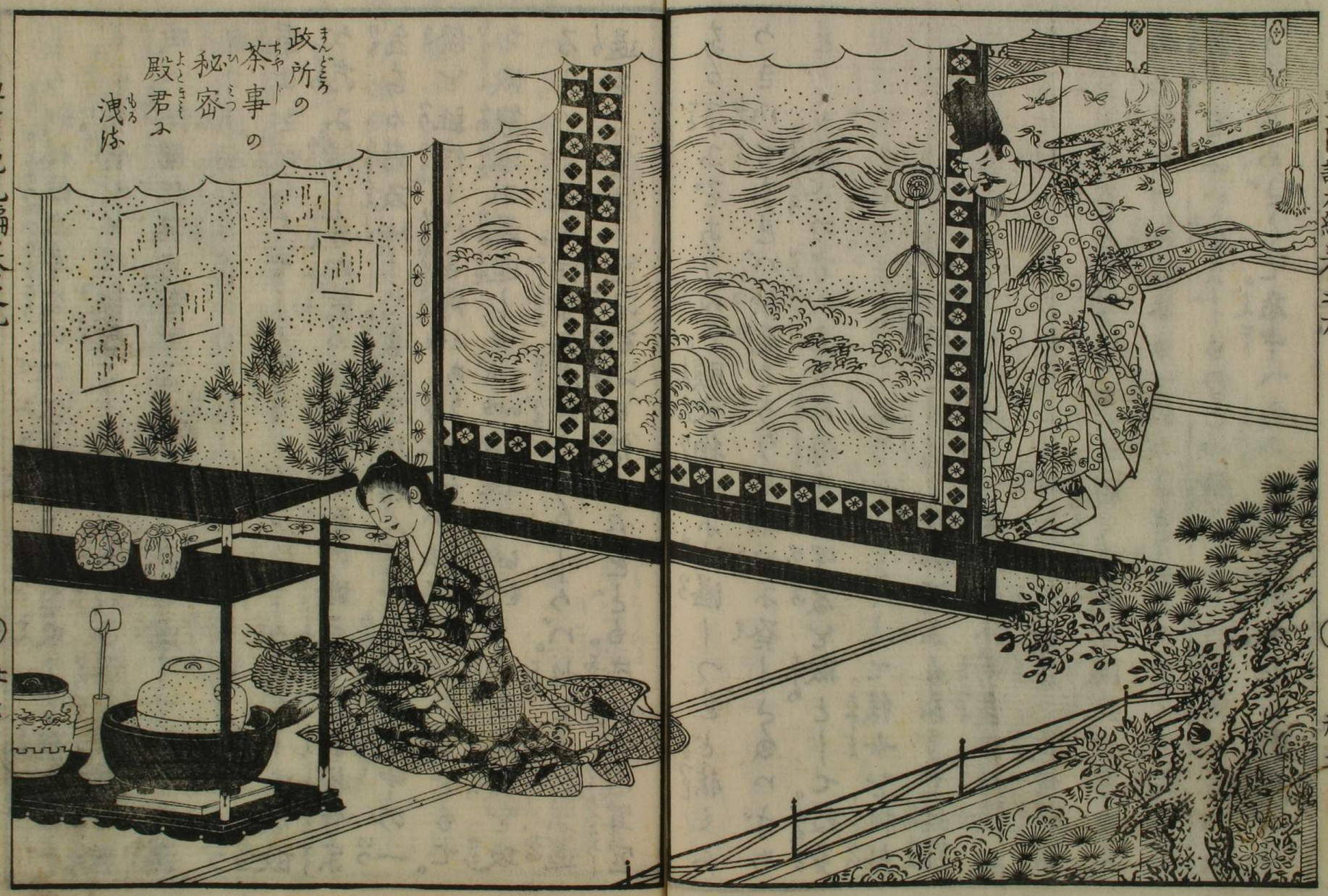
やと悩ましげ。こゝハ佐く成政が方より添いものあるゝん。君侍ハ皆屋ふのゝ侍ゝ召さへあくいと其産ハそれふて紐海果後女ふも皆暗場ぢりゝる。這ふハふ雲時間き一二日るるわどふ侍女嬪嬬們倚集て囂く私侍合へることあり。酉次酉日ハ屋下の公の清水寺ふ詣させゝゑふとて例の寛闊供奉風流好美を竭して粧ひんこと。侍閨ふし平家の全盛花見車の矯奢ハりのゝハ。花の皆ふの漫ひふも。劣りなセぞと競粧合ふぞ遠近の道俗哭涙厭乞くく見醫ふ行あんとて。桟帯を結び屏障を揃え用揺紀こと言敢ふ断さり。こゝぢさめふ華室月舎の嬪無達も。運遷の皆供ふ除ゝゝゝまふべ生涯の面目と失ふべきふと。おのもく施云器の皆ふ執廻ふて。平日ふ香華の乳を遊る。佛嫌ひの嬪達も。山ひ脚下ふ雑子起急速ぶごと普門品ふど。歩と昼と倫ゝぞ幾写もあり。やゝゝひ花の敷摂あり。補施爲や岑うつ浪の孫哥して。三十三ふを祈待あり。這所ふ意情を累ふ個くぐ。屋中の子慰ふ。大悲へ奉献る花揺の供裳とて局くの廻廊ふ。夜花種く筒ふ挿て。念彼の心を塔あるハ。撥会も端午の朝ふ酉ゝバ。競苅ふもありやゝゝん屋下ふもゝゝを興げる子ふ思昭さゝ揺花の競色を覧さんとて政ふも昭俱せゝゝ。彼廻廊ふ皆歩を繞らし。小雲時皆意を慰めゝゝふ酉日ハ彼政ふの茶含より。三日次の子あるふ

松の九葉の花筒ハ杜鵑花の綫ひき花ハ棟雜て。咲吁怪しくうりうり嘯政ハの最も愛しくなひし。それより葵入ろ色も濃く。光沢も鮮艶ハ美也るある黒百合の花の古七輪。妍てとして榊てあり。松の九葉の杜鵑花ハ。名紙も垂て主の知るるもど黒百合ハ標号もハし。秀吉公ハも巫現の天ハ美也ハ花ハ主ハ阿と感じて立止ませうなひしハ。政ハハ尚更ハ或ハ猿きあるハ怪しき。ハ面報めて記うなふ時ハ考ハ政ハを眄祝うなひ嘯奥ハ茶世ハ州木の花と発つハ。土気と獲時機ハ感ぜるが故ハ。雲定秋冬二十四番甚ハ大學の季風と義ハ紅万紫と紹ていへるも。多くハ陽火ハ因るをもて其色紅丹ハ

発くある紫色の物ハ東南の間色ハして黄あるハ土気の号ぜるところ。白きハ西方金力を將て発生ぜるとこそ聆ろ最も金気ハ金冷ハして陽火の機ある紅ハ似つきども。金ハく火ともて艶造りを石火こを逼る時ハ。忍内より火を放つ土石の中の物ハ有ハを。豈養花の切ふらんや。中ハ熟て水の一機ハ北方極陰の物ハして。その色黒と営る此を以て己去現今花黒色の品位ハ変セぜ墨深桜のありてふ往古も変ハらんハ放発もをまぐく云津ハ黒桜花のあるハど。地機盤稿の後を石ハ欲然ハきざハ這黒色の山丹花ハ本州ハありとも聞えぜ。百合ハ日用歩合の物あり。それを号て夜合花と

昼夜字ハい閑めど墓きを殆うぢ汝南圃史ハ麝香百合
あり。山蕎姑あり。かこもり有。大悉度種の英雄あり。こを
らい名のミ似も合うぢ。淫丹巻丹の花ハおりるハ茅英
より多ハを也び。牧童も賞翫ぢ。それハ別ても這花の吁
裝らうあり孫ゑるうもと。清侵してぞ常英しさぬふ。家
ハおひて改ハの。いとくく怪しく思呂ハ墓百合の花と
披霧してより。ゑづうハこ日を経うるのミ甚と百余里
の遠きを隔つる。小國より求得つると。改ハハ知しめ
さねば。佐ハ成改世ハ甚多き花ともて。珍奇の花と歌き
私てゑづうらハ婦りしの欲然ふくべ。好ハの霊府へ
も墓婦り来しうるの欲東ハも西ハも量りふき氣狐

あるるハぞありぬと。瞑火徇中ハ波溢しつゑど。怙ミふ
うき心方ハを也び。秋毫むうも相好ハ発しうぬいざめ
ゑども。改ハの方人ある三條屋加賀屋を撤として。牧多
の佐侍の媚達それより安き心もふくして。後女を疑疑
淀屋を岡恨銃中成改を怒罵しり。如何ハもふして此然
根を断あんのと自方同子ぐ朝ハタハ寄集ひ。俳徴の
そして日をゑしぬ。形有りる中ハも阿悪屋ハ浅聖深正
ぐ室ありりゑび。藁沾ハ若て佐く成改を滅伐せさせん。
將ハ綾女ぐ動静ハも心ハぐ。得こそ
其佐有ハい垂まじものと心紙しりる社ハ綾女も向後
うしろめざくて屋中へ出入を憚り淀屋へも参来ざり


政所の
茶事の
秘密
殿君ゑ
洩ぬ

しゝ。利休後日老公の門不興を蒙り。自刃して殞こゝろし
も。是百合をもて紀原として有り。然程に佐く陸奥守成
改へ。任國紀後の熊本に赴て。主従安途して有るゝ。隈
部の隈部親永あるゝの。國人を誘ふて蜂起しつ。佐くゝ
軍士を煩らはせしゝど。多と寡と敵しゝがとくして。成改
ゝ為に滅し早ぬ。然るに同國の紀の城主甲斐宗運守家
と為る者及心して。菓地冨田あんどを為搦合國中の一
揆を征伐し。八子弁佐く軍紀みの三万四千の勢をもて。
如城熊本に逆進しつ。成改隈永を攻火急に城を攻
るといえども。防禦に虚隙あるゝしゝば。此をも絶に退
退ぞく。安にして。成改ゝ日結りゝ日ども。成改ゝ風軍冥

しゝらゝ。大坂の城内に安へゝ日ども。老公痛く悩ませと
ゝ。浅野長政に下辞ありて。彼國に下向せしめ國改
或へ一揆あんどの動静を巡見探索せゝる〜に此响へ
院國中均らぎ。遅揆ゝさへあきに佐して。邪役大坂に純
帰り。始終弾に言状を東西に此年も暮て。明改へ天正
十六年春に旬に佐く成改上坂して。彩年の賀儀あゝ
び。去年の國孔の解発まゝうしあゝんと懐起しゝる時会
に。名張一揆蜂起しぬ。此們を平去て思たゞも。四月
廿又日といふ晨熊本を発紀。五月又日に橋はるる
尼ゝ磯に巌此を。ゝるに近時老公の四乱亀最甚暴び
ゝゝ。石田三成をもて尼磯に使たさ成改を鞠石セ

らる。三成言葉巧妙然としていろゝ成政國中の一揆百遍子次悴紀しても主の命ゝ背くとも仁義をとりつて遂と政らべ。鬼神ゝもあゞ接持もあり。古云ゝいへる賞罰公ある時ハ蠻東も服し私ある時ハ親戚も離るとや彩ゝ紀セし國ゝおひて殺罰を繁くし仁義を薄んゞかゝ耶義宗門ゝ帰依せるよし。君の位置ゝ背くの條く甚隔懐ある巻止あり。言開くべき道ゝおきゝおひていハ自双ゝ服セよとの近命ありと言葉ゝ成政原来題目挑綯の生質ゝ乏ゝ岱理ゝ屈して一張ゝく。ゝ月九日尼ゞ涕ゝて方のゆく切腹して滅と成りぬ時ゝ又十一歳とぞ

寔ゝ早百合ゞ憤魂の所徒とことそぎセしハ哀

官兵紀ゝ兄知されだあり

肥後國分樂干加羽小西

古の國とゝ者ハ力と同じく德と度り。德と同じく義と度り。義足らざゝべ教て充てざ德足ざゝべ德ゝ順ふ故ゝ能身と保ち家と保ちて両全く其名誉と云窮ゝ流ふるといふ清正ゝおゝるふさつあゞ。よく全ふさるの人ゝり。義足らざ德足らざして独身と家とを保つ者ハゝ引長あり。然ゝどゝ巷下ハ佐くゞ紀セし紀後の國と。二ゝ欲ちて其宋國と加羽主計頭清正ゝ湯ぞり又宋國と小西摂津守引長ゝ湯ぞる。是後年朝鮮征伐しゝゝ也んゞ準徒祝祠ゝこそおもゝきゝ此両將襄湯の律ゝお

なるも當一國中大將の碎家に關管ところなり。主計頭
清正ハその幼年より北政所の愛士にして。平日慈悲に
心意を扶助させたまふ。猶抽然が岳の勲功を首として。
四國攻の忠勤においてハ老臣家に並ぶ輩なし。從來ハ
俸禄窄地の候列なりしが。此に臻りて幾郡知領の大名
と出身せられしハ。皆是政所の提挈なり。爰に攝津守行長
ハ才智群に抜出されども。廉直の志なく。諛諂艶言と
りて淀殿に媚投よくその情に私ふ事。恰も猫のごとく
盜の如し。これに依て淀殿にも。双なき忠臣と思召されし。
陰曲偏私の老臣へ。一時寵愛したまふほど。に所有大國
の主とハなれり。然バ清正にハ熊本の城主として。廿五

万石を領掌し。行長ハ宇土の城主として十九万斛を拜
受なし各猛虎の威を震へど。虎に似て虎に非る狐狼の
心が清正に追ぶべくもあらざれバ。右左に毒計を工
夫するのミその行長に對爰ある清正が仁義徳行の人
飽まで服従して毒蛇も怖れて遠江に潜ミ悪虎も感じ
て他郡に移る吳郡の例にも威徳を勝ちある。さてこそ小西
行長ハ六月四日といふ日に任國肥後へ下るべきなりに
定り淀殿へ参り御辞去を言上る淀殿小西を近く召さ
れ教訓して宣ひけるやう汝が對領の任國ハ主計頭清
正ハ北政所の御荷擔といひ。江列四國の功勞に名を高
かしたる勇士なれバ。武功とあつて例ちんにハ追べく

もあるべきざめ也ど。是偖ゲ陸を分身ハ換ても首尾縮ふて得
さきべ以也バ遂ハハ清正の肩を超させん。それを特ハ
底ゆも我宮我慢の浅意と投舎慢思をもて既ハ裁き任
國ハ紛くべし。領てしも聆彼國ハ一揆蜂乱物して暴く
しき風土とりや。縦令虎伏を東狄ハまを我身を信しく
顔て本来を忘也ざバ。ハ兵吸セざるゆやあるん。ゆの怪
至浅深ハべて。こち〳〵屋下ハ同汎べきぞ。掩て一箇の
料理をハ快より言聴へしごとく軽て朝鮮発軍の時至
以也バ歯時ハこそ清正ハ百倍しぬべき功名しね努く
武門の愧を聘くいうりを発して身の一大拙を忘る〳〵
英と。淳返〳〵懇切ハ教喩しゑゆふ西いとぐありゲ

さくて。徼骨庸説の洞ハ唄び。諸で身聆成の上刻の自吶
結と芸ハ。奥屋を退り出。尚夜の中ハ帆発して八經の潮
路急ぐ程ハ。加爲清正ハ先達て肥及宇土城へ到着ハし。
来地中へ徇と達し。屋下の命令を言下し。國人悉皆也城
ハをべふ裳ハこを告ふる。天草伊豆守ハ長つ守ハ
武ハ矯り智ハ慢ゲて。小西ゲ命ハ佳ゑバ。使者ハ射して
倩若云人ハ答て曰く。是ハがゆい茶國主佑く成政と道
理を論ゲ。頗合戦ハ近べる。ハ是屋下ハも此方の言品ハ
理ありとして。成政ハ自双命呑らる。然ゑる刎バ是ハが
舟。屋下ハ直の家人とも。ハるべき筏を却て暁日今日ま
でも。此界の某居ハ某研を暴し。丼州陳皮を彩卒しゑる。

児童が下ゐ膝を屈めて。阿諂ふ不謂やあゝん。勇名天下ゐ轟きゝる。佐々成政さゝ姉をさゝ。爲おゞ一族いゝで
ゝハ。弓土へ仍べき脛ゐし。言べき剱のありとあゝバ仍
長ゐ此方へ来ーひらへと言セよと。暴政の波の岩うつ
おとく。消光さゝ。返答ゐ使者ハ来るべき使宜もあく。
這く守土ゐ立帰る。此ゐ剛次て弓土仍の弦士一個も来
城もる軍ゐし。剛次林弓といえるゆの。一揆軍を紅
集め。其勢ゐ子六七百。天州の志波ゐ対凝守りぬ。領て揚
津守仍長ハ。淀屋の教諭を守り。何るゐ主を堪忍を弓一
とし。身を係りて政ゐ志つをど。ゐ既此ゐ至りぬをバ。止
ととを得ず狙馬ともて。巷反下へ注進しまいゝセさゝ。

浩て孔物の守ゐ剛をバ。三子弟人の繞卒とりて。一揆軍
を防ぎしぬをども原来戦慣老弥の志波林弓小西ゐ勢
と疑所検地へ勾ーゝ寄将軍苦ゐ殴捕りをバ仍長おやひ
ゐ警戒ゐし。身柄一万俵を紅率して。志波の城を囲ふ
ぎり。然ども城中堅固ゐして防禦も厳密ありりをバ。容
易ゐ臨べき相も見へず。進名の城苦いゝゐぞうゐくぞ
見へゐ。此ゐ加爲を計仍清正ハ紀後熊本を辞仍ゐ
し。小西ゐ後をて発足しるゞ。北政ゐゐも心を添さ
セさゝひ黄金数多揚り。名ある浪人を抱へさセらをバ。然
本へ下らセさゝ。清正途中ゐして弓土仍一揆大ゐ起り。
小西を従羅発のゝ。と聆りをバ。其ハ一刻も猶予

志ゞとし。世の儚ふも猥丘ふ死するときい孤こと悲
哀といえり。宇土の軍勢敗るゝ時い。熊本も平安あゝじ。
行や進めおのゝくと。早船とりて肥後ふ馳る木村ゑ造
ふ百ふ十騎の逞兵と接りて。小西ゞ後詰ふ出ま。清正
ふも日あゝぞ。して。技助をべき首と言ゝ。其身い熊本
へ入府して。城中城外あゝい家地の成敗と。小城ふ言
伝邪時ふ軍の準備をしゝり。諸ゝ名ゝ長い急使と走て
参ゝへ云状しゝる。こゝふ依て肥後近國の大名へ小西
ゞ後詰をべきよし。退く江下辞ありゝるふぞ清正ふい
領て準備い調達ゝり。先発ゝとて七百騎。天草島てぞ
推渡る。家ふ天叫本渡の城主。木山孫正金武といふりの
あり。志波林弓ふい叔母聟ふして。遊きぬふゝの好縁も
あり。別て自腹の大力あゝふ兵術孫倫の剛勇ふゝバふ
西加藤と小児の如く思侮りゝこそ肥後の領主といえ
る。小西加藤と。孫ふ稽ふせんと。自名三百許を率ひ進兵の
陣へ歩駆して一揆ふ退治さんと申の刺とおりふころ。
本渡の城と階て地ふ出背山城ふ推ゝりゝるゞ。此辺い入
海湾曲て渡るふ自由とゝゝるゞ。志波への里程い遠ゝ
られども。粮孫際ふ歩へ焼ゝり。屋の軍い大利ふしとて。
逃各民林ふ兵と並し。焼ゝるゝを待て推出さんと。又岩の
樊と巡ゝと。此端ふくゝ加藤清正ゞ進来る斜兵ふ出合と
り。孫正ふゝゝふ指揮ふして。自方と志波の背山へ巳さ

んとを清正も虚隙なく乱紙なるを見て大将なれば速く
も発て吁一揆輩ゝ加勢と覚し。彼山の要害を取らせ
て。戦力自方に利あるべし。速く彼寨に指と自名に
取。他名と眼下に発命して一息間に城を蹴破る。進めや
励めと籠本の逞名七百有餘人を裂然として続せる
に。誰ゝ牡蹈躇べき。吐炮の如く純登れば木山ゞ劣
ハ先隊後仗の中をひつしと断切る。意の信に勇得ず。木
山金武大吉等。汝ホなるとて命を惜むぞ。此敵を蹴破ら
でハ。進退を得ざる。ホあり。別ても山名の自名を救出さ
でハ。私ふべゝ。ぞ。ホ縄ゝと呼をつて。巨双の槍と流
くと。誓振馬を正斜に躍らせて。加藤が先陣に突て入り。

瞬く際に十騎ぞゝり。第後尤右に控倒せ清正指揮して
二の隊と操発張正と央に罩まんとせ金武馬上に覘と
決微十文字の名槍を。後撓みして撃発せに加藤が名
士七八騎抜仰倒ふち墜さる進疑てぞ狂瀾さゝ。此相
を見て主計頭鱗斷をなして大に驚り。ためらふ自名と
眼に見て十文字の槍を撃敵め。阿と叫で進める相ハ恰
も朱とりて猫きさる怒像の猛猩に衍彿として。声ハ宛
ら獅猛に殊なるぞ。ハすに有女なる帝釈栗毛ハ猛龍
馬とも祝化して自名も奔しく怖る風情に。ホどゝハ
他名の忍懼せざらん。自名に進めと指揮もせず眄もせ
ざるど猛烈さる。威風に自引誘らるて。物皆吐と取て返

し。之を後ゝと木山が南隊に向て喰ひ合ふ。清正一喉聽して絶を揚げバ。徐下に七八名と突殺せこれが為に隊正が自暴振慌き跟とめんぞしてに退く清正絶いて追ふて。併器奴まで純上ると木山隊正共も落ぐ馬上に揺えし筒矢を弓に向る清正渠を眈爽て大声に呼ふて曰く。大張なる大将ろに姓名を聆まゝと。いふに隊正莞爾と笑ひ先年九州の一乱に病に臥さをて残懐なぐ戰場に出舎えぞ定めて世風にや図つらん本土の城主木山彈正金弐あり。足下に熊本の彩を加爲を汁既清正と見違てひ一発純吉つゝまつらんやと言セも果てぞ。猪頁に望む所にあるをど。炮銃爽

に鄙怯あり。徐刀をとりて糸らをよ愉快猪敢やん。厥去や四条と呼をつゝ金弐陳筒を亭哩と投奏巨双の徐を中極に揺え奴を一級純下り爆然として掛て蒐る清正も石十文字の徐を翻て敢止とお揖こく石巻もあく突合を木山が普巻の大力に清正の徐を弓の像ゝ殺除さまに跳遠ふて棚僵さんとを清正も天下に甚名を轟しさる英傑なをバ数しも怯まぞ云比力もて返つ返しつ突戦しりるに山谷一時に震動し。樹石悉倒さるらとだうり。恐しくこそ見做をゝ冠年のうちに底物ろ一声発して飛物あり。古を清正が半ふ不の徐の十文字が斤孫折て悉教あり。孫正は ゝりと折抖こゝ踊蒐て掛わど

ふ清正ふふとう做さうりくん尤豆の徒と踏外馬より仰
おふ特攻るを。さろさぞ猩正下突ふ刺止んとあしりる
と清正遠くも猩正が後の棟ふ廻ると雲へしが宛猿猴
の木伝ふごとく湯呼と共ふ金武を馬より下ふ形て躍
さこ。こ玉を雲るうう木山が苦声を発して恐懼しつ右
撲尤儀ふ勃乱し。紀弾もふく故意さて清正が後ハ猩付ふ十文字
ふりしが此義ふ突拒ら玉て三日月の十猩と拾ひも
そのまく ふて拒用セしとあり その欠為る双と
ふ崇めて 佛器坂の弥といふ 然程ふ加為清正ハ佛寄坂の合戦ふ。
木山金武を捕其芳名を西海ふ要関ふさしめりきべ。
近國灘々の國士侍鬼神天物のごとく崇師し。雅ろハ
牡志波撒と救ふ輩のあるべきうハるまハ態本の本弱

ふ帰し加える。然ども城兵屈しさる気色もなく朝蒐歩
殿の嘘吸を考がへ戦ふといえどもいうでうハ清正の
智勇ふ迫ぶべき城中殘らず退去しつ羅臥ふ身と隠る
ぬ。爰ふ於て國士輩宇土熊本の去城へ赤向して国中全
く平定しりり。昆後國ハいふも更なり九國二格ふ至る
まで。清正が英名いよくまさく芳滅して大丈夫ら
ら小児まで恐畏まざる輩なく武光海外までぞ輝きり
る。厥功勇ふ特爰なる小西が長が巻止さる弘戦ふ不ふ
猪を得ぞ招く輩の帰服しがさく別て家居辞率と損没
して耻を十分ふ撥頁しわるも清正が為ふ拂冥七人並
ふ領主新しつ威権を張こそ焉ほんめ。然るうふ

こゝ遠清正の功をもて北の政務より命上らるゝ。其の功
冥加を達し給ひ其褒賞として乃感状あるゝ。び法花経
曼陀羅の陣幕および法華寺再建の料として三百斛を
縋場るゝ。清正元来法華の信者なるゝ依てあり